
マホーギシ

点点点

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マホーギシ

【Nコード】

N0885W

【作者名】

点点点

【あらすじ】

魔法“ギ”師という者達のお話であります。

魔法を信じてない魔法使い達の、仕事と生活を綴った物語です。ほのぼのもありますが、概ねシリアス展開になるでしょう。

序章（前書き）

初投稿作品です。

我ながら、作家のご多分に漏れず魔法や超能力は大好物であります。

夏休み中、色々と鬱なまま書き上げた作品ですが、
どうかよろしくお願いします。

序章

『魔法』なんて、在る訳ない。
とある普通の女子中学生、増真^{ましま} 或子^{あるす}はそう思った。

珍しい名前である事は認める。

だからといってゾーマだのアルスだの、剣と『魔法』の世界の産物に喩えられてバカにされるのは、我慢ならない。
クラスメイトの頭の中には、無限の可能性と共に無限の妄想でも詰まっていると言うのか。

受験生としての自覚が足りない。

こんな賑やか、……… もとい騒がしい場所で勉強に集中などできるものか!!

……… 適当に仮病を使い、保健室に避難しよう。
早退や病欠などすれば、内申書に響くから。

そんな思考を施行した後、彼女は教室を飛び出した。

『魔法』なんて、在る訳ない。

とある十四歳の探偵、全一てんなしはじめはそう考える。

『魔法』なんて夢物語を、信じる頭はどうかしている。

『魔法』が在るなら、世はもつと便利であるはずだし。『魔力』があるなら、人は地球の寿命を削る訳もない。

それに『魔法』が存在したとして、今度は『科学』が同様に思われるなら。

その世界にとっての『魔法』は、俺達の『科学』の事。

そもそも『魔法』とは、想像できない工程の代名詞だ。

とにかく凄いものを見た時の、「まるで『魔法』だ！！」とまあこ

んな感じ。

要するに、存在しないからこそ存在する単語。

—— コンコン

「……どうぞ」

—— ガチャリ

「ごきげんよう、魔法“偽”師さん」

……………。

俺の肩書きに《偽り》の字が入るのも、その所為だ。

「……………ご機嫌はあまり宜しくないな。魔法“疑”師殿」

お茶を準備しながら、客間の席を薦める。

彼女の事だ。今日も注文は紅茶に羊羹に決まっている。

「……待たせたな、お嬢。

今日はボディーガードがないのか。人手不足は深刻な様だな」

どかつ、と我ながら暴力的にソファに腰を降ろし、目の前の少女を眺める。

小さな身体に金の長髪ゆるふわカール。フランス人形の如きフリル付きドレス。

いつもの様に今日も思う。
……全然機能的じゃない。

「人手を借りずとも、自衛はできますわ。
それに貴方ごときに心配される程、我がバルニエル家は落ちぶれておりません」

そんな俺を知ってか知らずか、彼女は澄まし顔で嫌味を返却した。
さすがバルニエル財団の令嬢、イレール「バルニエル。
歳は俺より六つも下だというのに、引けは一步もとらない。

「ま、戯れはこれ位にして。
………今回はどんな事件だ？」

空気が一変する。
張り詰めた重い空気は神速での思考を可能にし、彼女の思惑を探り
当てようと瞳は自然と見つめ合う。

「今回のターゲットは………」

イレールは、胸元のポッケから取り出した写真を提示する。

「このメガネのサラリーマンですわ」

そこから、俺の仕事は早い。
立ち上がり、自分の部屋に向かう。

「了解した、実行は今夜、報酬は翌朝手渡しだ、気を付けてさっさと帰れ」

言うべきを言い、颯爽と部屋を出た。
そして聞いた、彼女の最後の言葉は。

「……………世界一、魔法使いに近い男。實力は如何程かしら……………？」

——夜。

新月見守る、光が射さない貴重な暗夜。
私が好きで、毎回近所の公園に散歩に出かけるそんな夜。
魔王と勇者の名を持つ私は、とんでもないものを眼にしまった。

「……………っち。」

オイ、女！！ 死にたくなければそこを動くな……………！！」

背中越しに私を脅すのは、同い年位の男の子。……………だが、その右手には剣らしき物が光っていて。

そしてそれは何故か、刃の長さが変化する。

……………おかしい、オカシイ、奇怪シイ……………！！

私はつい今朝まで、日常の中に居たはずだ。命の危険がまったく無い、安穩の平和に。

それが今や、長さを変える変な剣とその主に自分の命を握られている。

刀剣を携行する事すら日本ではすでに異常だというのに、それが刃の長さを変える？

まるで魔法だ。

……………しかし所詮は《まるで》でしかない。

きつと、何か絡繰りが在るに決まってる。眼前の男子も、何か理由が在ってのこと。

そうだ。そうに決まっている。

「……………つち。」

オイ、女！！ 死にたくなければそこを動くな……………！！」

……………そう忠告はするものの、恐らく彼女は聞いていない。
そして見えていない。

彼女を付け狙う無数の電弾が。
それを放つメガネの男も、俺が弾く電弾も。

幸い、新月の夜と動揺が連なって、女子中学生は危険を認識してないし、俺の顔も見えていない様だ。

人目を遠ざけなかったのは傲慢故の誤算だったが、いつも通りに仕事をこなすだけで良い。

「電弾発射の絡繰りは……………」

魔法使いを気取り、犯罪に手を染める魔法偽師。
その始末を、いつも通りにこなすだけで良い。

「……………そこか…!!」

メガネの男の背。

そこで金属光沢を放つ、保冷タンク。中身はかなりの可能性で過冷却水が詰まっているだろう。

ホースで繋がった水鉄砲で刺激を与え、また発射する事で過冷却水から電弾へと変貌する。

ならば、タンクに衝撃を与えて凍らせてしまえば良い。

運良く、長整刀を持ってきた。

斬り付ける事は強度的に難しいだろうが、振動という衝撃を与えられる。

すぐさま実行。

一瞬で終了。

メガネは四肢を凍り付けにして息絶えた。

「……………お前は今夜、何も見なかった。剣を持つ男など見なかった」

背を向けたままそう残し、サラリーマンを担いで帰る。

……失敗など、誰でもする。

魔法偽師であつても、《世界一魔法使いに近い男》の称号を持つていても、だ。

次回から、失敗しないよう心がければ良い――。

終。

序章（後書き）

どうだったでしょうか？

今回のみで終わっても良いよう、序章という形に納めましたが、コメントや感想が1つでも入るなら続きを書いてみようと思います。

続きの気になる方、感想という、僕のエネルギー源を恵んで下さい。
お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0885w/>

マホーギシ

2011年10月8日22時07分発行